

「富富富」の生育状況と技術対策

令和元年 7月 19日

農業技術課 広域普及指導センター

1 生育状況（実証ほデータ）

前年に比べて、草丈、葉齢、葉色は並み、茎数はやや多くなっている。

幼穂形成期は、前年より1日早い7月12日となった。

今後、気温が平年並みに推移すると、出穂期は、前年並みの8月2日頃と見込まれる。

表1 「富富富」の生育状況（7月16日 栽培実証ほ）

年次または 試験内容	ほ場数 (筆)	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢 (L)	葉色		幼穂 形成期	出穂期
				(本/株)	(本/㎡)		葉色板	SPAD		
R元	12	5月13日	69.2	25.2	544	12.4	4.2	37.8	7/12	(8/2)
H30	19	5月15日	70.9	23.7	520	12.4	4.2	36.7	7/13	8/2
H29	16	5月14日	67.8	25.6	529	12.2	4.1	36.2	7/12	8/3
前年比・差		-2	98	106	105	0.0	0.0	1.1	-1	(0)
早期田植栽培	6	5月4日	72.9	26.9	575	12.7	4.1	38.5	7/9	(7/30)
高品質安定栽培	6	5月15日	68.6	24.8	548	12.2	4.1	35.7	7/12	(8/2)

注) R元・平均: 生育観測栽培と高品質安定栽培・対照区(合計12ほ場)の平均

H30およびH29: 特別栽培米を除く、それぞれ19および16か所の平均

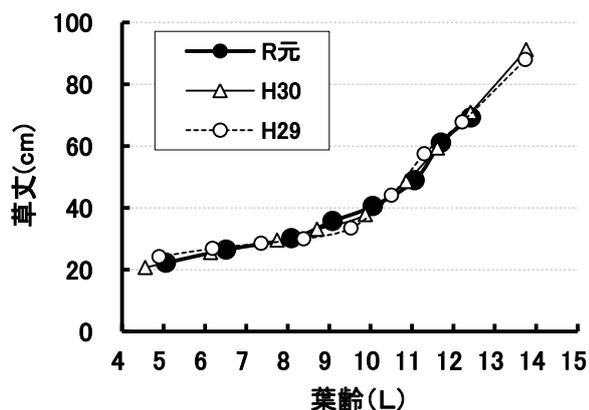


図1 草丈の推移（富富富実証ほ）

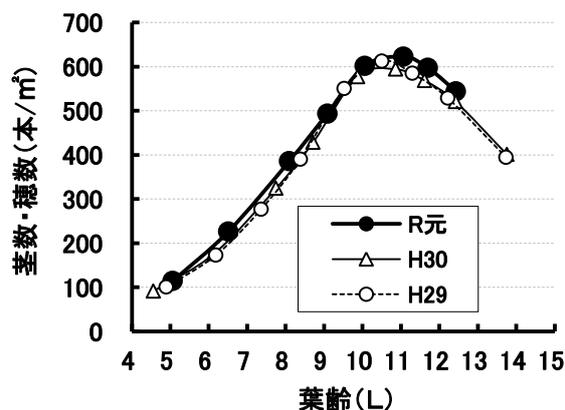


図2 茎数の推移（富富富実証ほ）

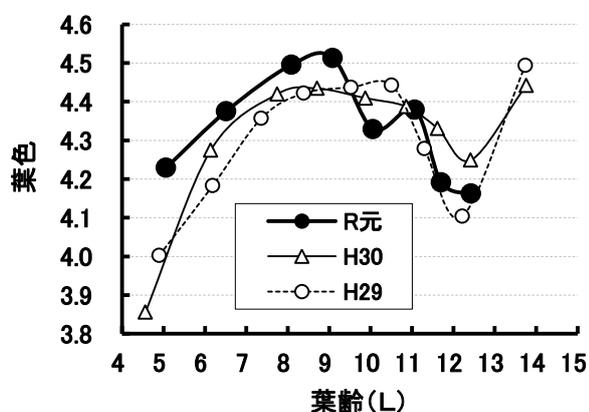


図3 葉色の推移（富富富実証ほ）

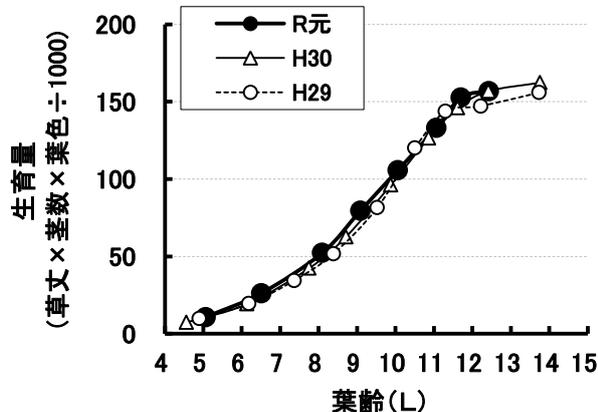


図4 生育量の推移（富富富実証ほ）

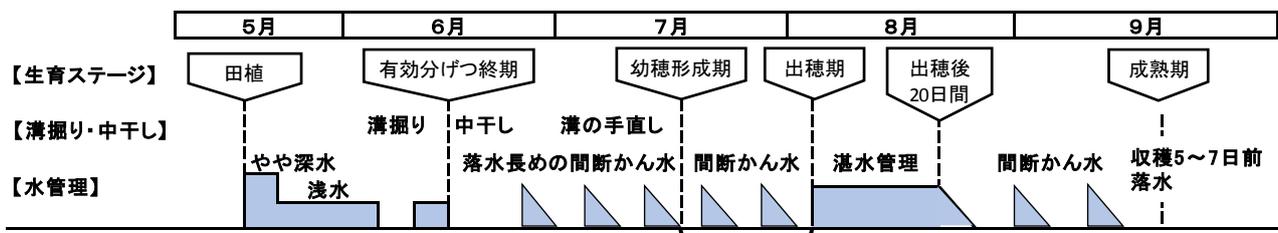
2 当面の技術対策

- ・ 茎数が多く葉色が濃いほ場が多いことから、幼穂形成期から出穂期までは間断かん水を行う。
- ・ 出穂期以降 20 日間は湛水管理を徹底する。
- ・ 分施栽培では、2 回目の穂肥を確実に施用する。
- ・ 肥効調節型基肥栽培では、原則、追加穂肥は施用しない。ただし、幼穂形成期 14 日後の葉色が淡い場合は、追加穂肥を施用する。

(1) 水管理

- ・ 本年は、茎数が多く葉色が濃いほ場が多いことから、幼穂形成期から出穂期までは間断かん水を行い、過剰籾数を防ぐ。
- ・ ただし、幼穂形成期の茎数が 580 本/m²以下で、かつ SPAD 値 35（群落葉色 4.0）以下の場合は、飽水管理を行い、稲体や根の健全化を図る。
- ・ 出穂期以降 20 日間は湛水管理を徹底する。

<水管理のイメージ>



※マニュアルには、「飽水管理」と書かれているが、本年は、葉色が濃いほ場が多いことから、幼穂形成期から出穂期まで間断かん水を行う。

(2) 「富富富」分施栽培における2回目穂肥

- ・ 1 回目の7日後に窒素成分で 1.5kg/10a を確実に施用する。ただし、1 回目穂肥を施用しない場合は、幼穂形成期の 14 日後に窒素成分で 1.5kg/10a 施用する。
- ・ ただし、2 回目穂肥を施用する時期の群落葉色が 4.2 未満の場合は、穂肥量を窒素成分で 2.0kg/10a 施用し、穂揃期の葉色を 4.5 に誘導する。

(3) 「富富富」肥効調節型基肥栽培の管理

- ・ 原則、追加穂肥は施用しない。
- ・ ただし、幼穂形成期の 14 日後の SPAD 値 32（群落葉色 4.2）未満の場合は、出穂 3 日前（走り穂が確認される頃）までに窒素成分で 1.0kg/10a 程度の追加穂肥を行い、穂揃期の SPAD 値 35（群落葉色 4.4）に誘導する。

(4) その他の管理

病虫害および雑草防除は、コシヒカリに準じて実施する。ただし、生育期間を通しての化学合成農薬の成分使用回数が 12 以内となるように留意する。